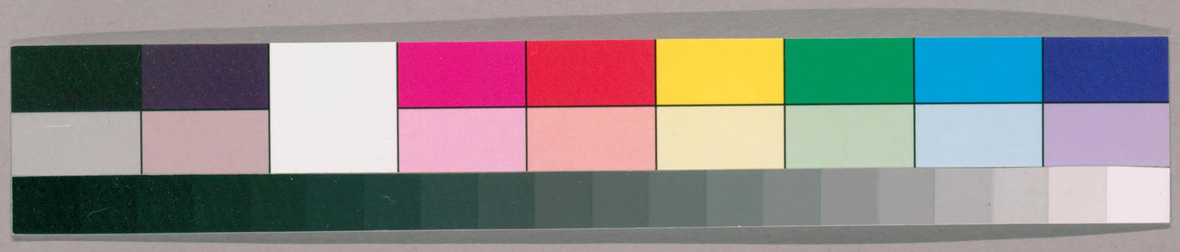

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』 請求記号 WB12-59

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

本文 8P×2段×24字×29行
見出 10行ガスキ
天地 両ミミ 一本

WB12
59

6号

今から三十四年前、昭和二年一月に、哲郎は、文部省在外研究員として、ドイツ國への留学を命ぜられました。その二月十七日に〆郵船の[redacted]出発いたし、翌三年七月三日に[redacted]郵船の[redacted]帰朝いたしましたが、この一年半の間に、その一年半の間に旅先のあちこちから私によこしてくれたものの一部でございます。〆

九月十八日

和辻哲郎

一行アキ

〆フアイルから。捨てずに」という編集部の注文なので、さういたしました

和辻用箋

1092353

書 51.12.2 国会

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』 請求記号 WB12-59

ガラス使用

WB12-59

一、昭和二年二月十七日　白山丸

今、多分屋島だらうと思ふ島の見える所を通つてゐる。天気もよく景色も大変いゝ。

今朝は涙の出るのを押へるためになるべく照や京子や夏彦から注意をそらす様につとめてゐたが、汽車の出る前、思の眼に一杯涙がたまつたので、堪らない気持になつた。汽車が動き出してからは、少し頭がフラ〳〵する

1035323

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

やうに感じたので、これは危いと思つて、一生懸命に棒につかまつてゐたが、早く引こまないと怪我をするかも知れないと思つて、プラットフォームを出切らないうちに引込んだ。しかしすぐに、せめて見えなくなるまで見てゐたかつたと思つて、胸がふさがり、神戸につくまで、何だか気が晴れなかつた。

出来るだけ元気につとめてはゐたが。

多佳達を汽船まで連れて来なくて、こゝまで来ることと、小学校の校長したと思ふ。大阪までくる

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』 請求記号 WB12-59

ガラス使用

さんや、武田薬店の主人などの見送り人で、
プラットフォームは一杯、のみならず船まで
見送る人で汽車はすし詰。あんな中を子供な
どがみては反って心配でたまらなかったろう
と思ふ。船が出る時なども実境の上に人が一
杯立ってるので、もしあんな所に居るのでも
てみたなら、いつまでも、をまで心配しな
くてはならなかった。
船へ仁豊野の母と、弘夫婦と子供とが来た。
人ごみで危ないからと云って、十一時半頃

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

にこの連中には帰ってもらった。まさか郵便
にして送ってもらおうとも思ってもみないが、序の節、
お礼と一所にこの事も断って置いておくれ。
そのあとには、京都からの谷波、落合、成瀬、
達夫、安倍恕、目賀田（京大倫理出身。藤井
さんの弟子）松岡譲、上原。大阪からの谷川、
松本重彦、などが残り、又絢さんと春樹夫人
と弟、が来た。この連中が突堤の上にうたが、
危いとは思はず、船の動き出した時は大分気
が楽だった。京都停車場の事から考へると、

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

照たちが船まで来てみたら、どんな気持になるか解らない。

出帆後、大西と話をしたり甲板を歩いたりして至極元気だったが、少し先からまた少々気がめいり始めた。自俥車にのるときいどうして夏坊を抱きたいのうなどうたらうと、どうして叔父貴のそばへ乗ろうなどと変な事を考へたらう訳らか、今くよくしてみる。実は叔父貴のそばへのっても夏坊はなから乗ってくると思ってみたのに、それがち

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

の除うまく行かなかったのだ。甚だ残念で気
にかくってみる。かういふ風に細かな事が気
にかくるだらうとは豫期してゐなかったが、
どうも案外たしかでない。
これだけ書いたら少し胸が悪くなったから
よす。出発の日撃ち照撮

一行アキ

二、昭和二年二月十八日　白山丸

昨夜は月がよかったが、風邪をひくといけ
ないと思って甲板には出なかった。船室の窓

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

から見ると四國の山らしいのが間近に美しく
見えた。
今朝未明門司着。眼が早くさめたので六時
頃から起きて見てゐると、少し明るくなると
共に石炭舟が舷側へ3つ4つ寄って来て、非常な速力
で石炭の積込を始めた。この調子で明日まで
石炭を積込むらしい。機械の様になって一々
ざるを手から手へ渡して、石炭の積込をやって
ゐる人足たちを見てゐると、何となくあはれ
を催ほす。

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

昨日上船すると間もなく、後藤朝太郎（支那の学者で、門司まで同船がわかって来て、門司まで同船が出来ると大変喜んでみたが、書斎の時には大西と私とを事務長（パーサー）の食卓へつれて行って紹介してくれた。夕食もパーサーと一所に食った。田辺君に中学で教はった人で、吉植や赤弘巖太郎などの後輩。音楽講のお父さんからも、寺井（私の同級生でこの間東京で逢った人、郵船につとめている）からも、お噂をきいてゐました、との事。

（和辻用箋）

（洋紙罫）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

今朝になると又連れ出しに来て、今迄は船長の室につれて行き、今までの話ずきの人に取つかまつたお蔭で、自分の方からしようとしない内に船長も事務長もおなじみになつてしまつた。

昨夜はやはり眠れなかつた。あれだけ押へつけてみたのだが、やつぱり昇奮してみたものを見える。しかし胃腸の工合は悪くない。甲板をたんねんに散歩(字消して)することと工合がいいらしい。天野からそれをきいてみなので、

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

昨日は上船後大西と一所に教室にては喫煙室で休み、また数歩に出ることいふ風にして夕方まで過しました。日本人は殆んど甲板へ出て来なかったが、私たちと同じに西洋人が二三人散歩してゐた。

気持に一寸障が出来ると感傷的になって困るが、しかしのんきになる様にこれから努力する。「石にかぢりついても」神望衰弱にはなりから安心して下さいとおばあちゃんが来て下すってとれほど安心なくれ。

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

が出来たが解らない。照からもくれぐれもよろしくおふを云ってお呉れ。さうしておばあちゃんを大事にして病気にさせない様に。また おばあちゃんがなるべく永く落ちついてゐて下さる様に。

京子も夏子もあまり叱らないで、のんびりしてお置き。学校の事位少々出来なくても、照が神童をイヲ立たせない方がいくらいいか知れない。学校の事が一寸位好く出来たって、その代りに照が病気にでもなれば、その方が

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

百倍も重大なまだ。
大事で、その他のまは皆二次三次の事だから、
その矢をよく気をつけて、「石にかぢりついて
も」病気してはいけない。十八日。拳郎照
擾

一行アキ

三　綸葉書

いよ〳〵今日の正午に出帆、日本を離れる。
昨夜もいろ〳〵なまが気になり、皆の顔が眼
にチラついてよく眠れなかったが、それでも

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』 請求記号 WB12-59
ガラス使用

七時間位は眠れた。追々によく眠れる様になる事と思ふ。私の方は一人で努力して辛抱する。照も淋しいだらうが辛抱して下さい。身体を大事に。皆を可愛がって。指の痛

一行アキ

四ノ一九二七年二月二十日ノ白山丸のデインナーのメニュー

毎晩かういふメニューが食卓に出る。これを持って帰って手紙をかく時に使ふ積になっ

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

(書簡箋)

(和辻用箋)

てみるが、書く場所が少ないからあまり便ら
ない。
前の手紙に書き忘れたが、マルセーユへの
手紙は、宛名を次の様にすること。

Mr. T. Watsuji
1st class passenger of S.S. Hakusanmaru
℅ A. V. Fenton & Co.
1, Rue Beauvau
Marseilles
France

うちに書き漏して来たのは間違い。なほ、三

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

15

月廿六日頃マルセイユ着の豫定だから三月初
め頃以後の手紙はマルセイユ宛ていは駄目。
三月十日頃までのは巴里大使館気附でいいが、
その以後のは当分皆伯林大使館気附の事。
巴里大使館気附のは A l'Ambassade du
Japon, Rue Greuge 25, Paris.

(和辻用箋)

五　エハガキ四枚つづき　二月廿二日

(二)門司から出した三通の手紙は皆受取ってくれた事と思ふ。門司を出ていよいよ玄海へかゝると波がだん〳〵大きくなり船もかなりゆれた。廿日朝の食卓にはワクがはりそれたから、あれで相当な荒れだったのだと思ふが、しかし頭をカラ〇ポにして甲板を歩いてみると、船酔はしなかった。一寸でも家の事を考へ浮べると、胸が変になってくるので、なるべくそれてを忘れ、馬鹿の様になって甲板

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

で運動してみた。そのうちに船が動くのでなく、地平線が上下に動いてみるのだという気がし始めた。それからはだんだん気持が確かになって、廿日一杯は何でもなく過ぎ、廿一日の朝にはもう上海に着いてみた。ランチが九時半に出るというので、手紙をかくいとまなく、大西ともう一人、叔父さんの弟子の中島医学士と三人で上陸し、大西の親友で上海の住友銀行支店支配人の今村という人を訪ね、その手下の人に

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

案内して貰って自働車で町を見て歩いた。それから午飯はその今村氏に一品香（イッピンシャン）という家で馳走になった。食後大西が少し買物をしたいというので、一所に上海の銀座に当る様な町を歩いて、みやげものやという家で支那風の巻煙草と香箱とを買い、日本へ小包が或は便宜の方法で送って貰う様に頼んで来た。（今郵便局はストライキで休んでいるから、或は誰かが日本に帰る時に頼む事になるかも知れない。とにかく一二ヶ月はかかるつもり

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

でみてほしい）。ついたらそちらから今村氏名前は学士会名簿で解るだろうと思うが）へ礼状を出して置いてほしい。

（三）上海には大きなデパートメントストアが沢山ある。その一軒へはいって何かないかと思って探した。上海は物が安いからラクダの毛布などが二十円位であるとは思わなかったのだが、さういふものになると日本より安いに違いないけれども、送料や関税を入れると結局同じ位になるさうに思はれるので

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

PARISIEN BOND

てみた。帰りならば自家用として持って行けるからいいが。さうして大丸で探してゐる内に、この間のウール無かった薄毛のシャツを一揃へ買った。船の中は暖房が完備してゐるので、この間のウールのシャツなどは着てゐられない。コットンの白いシャツ、又でもさうみさうな位だから、せいぜい薄毛のシャツで沢山だ。ウールのも大丸で買はないで、上海で買へばよかったと思った。慣れた人は上海へ着て支度をするさうだ。

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

た。(四) 五時頃大西と別れ、中島氏と二人で市
時のランチで船へ帰ったが、帰る途中ランチ
が危なく他の船と衝突しさうになった。衝突
すればランチなどでは沈むかも知れないので
もとでにヤツとした。
ランチがいまどって七時一寸前に船に帰り
たが。晩餐後は船長や事務長と十時近くまで
話をしてゐた。事務長は文学ずきで中々面白
い人で、もう仲よしになった。
今日はもう上陸をあきらめて手紙をかく事にし

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

た。かういふ簡單な手紙でも書くのに半々手間どる。他の船客は大部分上陸したらしい。

昨夜も一昨夜も五時間位しか眠れなかった。もっと運動をして熟睡の出来る様にしようと思ってゐる。照は「淋しいだらうが辛抱して」おくれ。熟睡して頑張ります。

一行アキ

六

昭和二年二月二十五日

朩三り朝上海出発。上海といふ所は揚子江の支流を挿んで住置してゐるので、船のはい

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

る所は墨田川の二倍位のごく狭い川になつてゐる。そこに各國の軍艦や汽船が入つてゐるので、非常にゴタ〳〵とこみ合つてゐて、大きい船が動くのはよほど骨が折れるらしい。

さういふ川を下つて揚子江の本流へ出るには、たしか二時間もかゝつたかと思ふが、両岸には麦畑が緑に見え、楊らしい葉の落ちた樹木がその間に並んでゐた。見渡す限り土地の高低のちつともない、海と同様に平べつたい平野で、少し遠くから見れば海の水平線の代り

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

に少し太い褐色の線があるだけだ。近い所から見れば、船が高いだけにいくらか畑地が見渡せるが、しかしそれでも海の波の代りに畑があるだけで、感じがいかにも海に似てゐる。

途中で支那の村が一つあったが、その家の小さくて穢いことは、東京の貧民窟よりももっといい。上海のせいたくな所を見てまたあらでかういふ村を見ると、その差違のちんまりしいのに驚かされる。

本流に出てふと、両岸はただ太い一本の

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』 請求記号 WB12-59
ガラス使用

緑に見えるだけ、どこまでが揚子江でどこからが海だか解らない。何時間経っても揚子江と同じ泥水で、その穢い事、とても日本で考へてゐた様な海ではない。廿三日の日が暮れるまで依然としてその泥水の中を船は走って行った。尤も午後になると左舷の方には島が見え、右舷の方には山が見えた。

廿四日の午頃になってやっと海の水が青く見えて来た。夜は台湾海峡にかゝるので、少しは揺れるだらうといふ話だったが、りくあ

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

んばいに大した波もなかった。
船の食事を平生よりもいくらか喰いすぎて
る所へ、上海で支那料理を御馳走になった
りなどして、食欲はあるくせにどうも腹が張
っていけないので、廿三日、廿四日は、午前
も午后も甲板に出て運動した。大西は風邪気
味だと云って室に引込んでゐたが、それでも
まとから出て来て一所にやってゐた。そのお
陰で昨晩あたりから大分立合がいい。
今日（廿五日）は朝甲板に出て見ると、丁

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

今日（廿五日）は朝甲板に出ると、下
痢をした後の様な変な天気。
よう〳〵一ぱいに雲の切れ目もでき
ぬ様な一面の雲に覆われた。
午後になると雲の切れ目から青空
が見え出し、雲の動くのが速くなる
ようになった。大変な風になって
来た。甲板に出ると、帽子が飛ばさ
れそうになる。
廿六日は、昨日とは打って変って
大変な風。雲は飛ぶ様に動き、
午後になると雨が降り出した。
夕食後、船室に入ってから、
ベッドに横になって、
ぐっすりと寝込んでしまった。
廿七日は、昨日とは打って変って
大変な風。雲は飛ぶ様に動き、
午後になると雨が降り出した。
夕食後、船室に入ってから、
ベッドに横になって、
ぐっすりと寝込んでしまった。

（和辻用箋）

度四月頃のやうな陽気で、空も晴れ、大変気
持がよかった。門司を出て以来、こんな天気
は今日が初めてだった。気持がよいので、朝
食をすますとすぐデッキにリアードを始めて、
午食の時まで続けてみた。午食をすませて甲
板を一まはりしてくると、自然に手紙の書け
る様な気持になって来た。然し海にはもう少
し前から霧がかゝって、二三分おき位にブー
ッと大きな号笛を鳴らしながら進んで
行く。

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

今朝はもう台湾の南方に出てゐるので、いるには香港へ百十五哩の所まで進んでゐるとの事だった。今夜八九時頃には香港へつく筈になってゐる。

上海でストライキのため一日遅れたので、香港は夜ついてすぐ翌日の午頃出帆する由。見物は午前中に二三時間位しか出来ないらしい。しかし所謂名所が見られなくても、香港という町だけ見れば沢山だと思ってゐる。上海とか香港とかいふ所は、一つの町として

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

余程面白いところがある。同じ様に西洋風になってるても、東京や大阪とはなり工合が違ふので、かういふ都会の次を一つの象徴として見ると、支那といふものゝ特殊性や、支那へ喰ひ込んでゐる西洋の勢力などが、日本のそれとの比較上、よほどよく解るやうに思はれる。

大西が断りた退屈がつてゐるが、私は「この機会にせめて体でもよくしよう、どうせ苦行に出て来たのだから」と覚悟をきめてゐる

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

一行

ので、そんなに退屈しない。海の空気を吸い、
ら駈走を喰べ、運動に努める。さうして仕事
は何もしなくてよい、又しようとしたって出
来ない。かういふ状態一つを保養院へ入
ってみる様な状態一つを利用して病気の神経
衰弱でもなほさなくては、他になほす機会が
ない。退屈してみると神経衰弱がなほせない。
といふ様な気おになってみる。考へて見れば
こんな生活をしてゐるのはずぼん馬鹿く
しいが、しかしこれ丈犠牲をはらって止むを

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

得ず出て来た以上は、この馬鹿くしい生活を出来る丈生かせる様に努める外ないと思ふ。

一行アト。ノイノイノイノイノイノイノイノイ

八時半港に入り、八時半に船が泊った。九時にランチが出るので、それに乗って教歩に出かけた。波止場の直ぐそばに香港の一番立派な町がある。建物は上海とはまた違って非常に特徴がある。全く欧風の建築にどこか支那が加はってゐる。その加はり方が上海と大分違ふ。

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

一行アキ

十一時のランチで帰って来た。明朝は早くから町を見物に出掛け、正午に出帆する豫定。明日書けないといけないから一寸かく。みんなによろしく伝言を乞う

七 昭和三年三月二日 エハガキ四枚

一字下げ

(ハ) この写真は香港の町の夜景、海から見たところ。白山丸が香港へ入ったのは七時半頃で、写真にある景色を船から見たのは八時頃だっ

(和辻用箋)

た。その日は少し霧がかゝつてゐたので、写真にある様に家の形は少しも見えず、たゞ黒い柔かい山の影と、そこに点々と光つてゐる燈火だけが見えた。丁度黒いヴェルベットの上に宝石が光つてゐる様で、実に美しかつた。それを眺めてゐる内にふと頭に浮んだ事だが、この景色の重大な要素は電燈だから、結局はエディソン以後の新しい現象だといふ事になる。同じ香港でも、十九世紀末まではかういふ夜景を持つてゐなかつた筈だ。さう考へる

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

とこれも「近代的風景」の一つになる。

うしろの山に点々と火がつりてみるが、ちの山はピークと云ってケーブルカーでのぼる様になってゐる。こいへはとうくのぼなかった。霧が深いので、のぼったとうで眺望はないだらうと思はれたから。——写真には出てゐないが、この山の中腹にももつと火が見えた。

(2) この写真たある町は香港の海岸通りで、船のラン千の着くとうろは、右下の角うも

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

う半町ほど手前になる。そこから上って左手の建物に添って、廊下の出てみる白い建物のも一つ手前の建物の中に、たしか郵船の支店があった様に思ふ。

この海岸通りは着いた日の晩に散歩し、翌日午前、出帆の前にも散歩したが、建物は皆さうけてみてキタない。暫く目についたのは、左手の建物に見える様に道の側に柱がなんでゐて、その柱の中が人道になってみることだ。つまり建物の廊下と人道とが一つな

のだ。さうしてその柱には（大抵石柱なのだが）擬宝珠の様な装飾がついてみる。丁度田柱に杖をぶつけた様な恰好に見える。建築としてあまり感心したやり方ではないが、そのために一種特別な感じを出してみる様に思った。

(3) この写真の町は(2)に書いた橋所をはいって行ったところ。それを反対の方から見た景色で、突当りの建物に添って左の方へ行けば一町程で海岸へ出る。突当りの建物の手

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

二階の小さいかんばんの出ている所はアレキサンドラ。カフェというふライオン式のカフェで、最初の晩には京都の経済学部の八木助教授の友人に八木氏などと一所でお茶の巾勉強になった。この通りを手前の方へもう半町も行くと、いろいろな商店がある。写真の向って左方はホテル。

香港碇泊の第二日目には朝六時頃に起き、七時頃モーターボートで上陸し、自働車をやとって所謂島めぐりをやった。町を出はずれ

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

て、山をのぼって行くのだが、霧が深くて初めは景色が見えなかった。たゞ道路がすこかリアスファルトと岩で固めてあるので、ドライヴは甚だ気持がいゝ。道の近くには一二間位の高さの松が見える。それは日本の松と少しもかはらない。時々道端に葦に似た草が見える。山の中腹にそんな草のちるだけが珍らしい。

(4) 島めぐりの時に見た景色は写真が手にはいらなかったから言葉で説明する。一半時

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

(写1)

間程も山の中腹をドライブする内に、霧の絶間から海が見下せる様になった。水のきれいな、さうして磯辺には時々白砂も見える美しい海岸であった。やがてやゝ廣い海岸でホテルのある場所へ出た。そのホテルで朝食を喫った。それから今度は反対の側を廻って香港へ帰ったのだが、この帰り途には畑がちょい・支那風の民家がちょい・墓地がちょい・獅子頭があって、中々面白かった。畑の間に百姓家の見える景色には日本とよく似たところがちょ

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

写1.

たが、家は瓦屋根と白壁でちながら大分変ってゐた。猫仔町なども汚濁あたりの猫仔町とよく感じが似てゐたが（殊にきたないところや臭いところが）、しかしそのきたない家でも南京町の支那人の家をうんときたなくした様で、一寸日本のとは感じが違ふ。

この写真の景色は、帰りに香港の町の方へ下りてくる途中で見た景色の様に思はれる。椰子の樹の中程に見える遠方の建物（大きい建物の一群）が前に云った香港の銀座にあ

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

る個所で、斜面にあるのは大抵住宅（大きいのはアパートメントハウス）だ。大きいアパートメントハウスにすると、小山と同じ位な大きさがある。

一行アキ

七の日、前の四枚の絵ハガキを封じ込んだ手紙を出したが、正午に香港出帆。空は晴れて海も美しく、航海は非常に平穏だった。この日あたりからだん

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

だん夏らしくなり、ほぼ六月頃の陽気になりました。

廿七日には船員が皆白服になるというので、私もアルパカにコットンの下着になろうたが、それで丁度いい位。体をよくしようと思って、午前も午後も甲板へ出て運動した。翌廿八日には白服になっても汗が出る位。しかし追々シンガポールも近づくので、出発前に書きかけた原稿を仕上げて置かうと思って、朝食後一しきり運動してくると一時間半程で書き、

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

又午后には入浴前に一時間半ほど書いた。物を書くとやはり頭が一寸変になるが大した事もなかった。翌日も同じやうにして、とうく十枚ほど原稿をかき、それからやっと岩波へ送らうと思ってみる。

昨夕シンガポールの三宅氏から、原氏のシンガポール着船を待ち迎いに出る、とりあ無線電報が来た。今晩はシンガポールにはいるらしいから、明日あたり消息が分になる事と思っ

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

てみる。善一郎君には多分逢へないのだらう。
昨日は私の誕生日だったので食卓でその話
をしてみる内に、二月十五日の事を思ひ出し
て気がふさぎ出した。頭に家の事が浮び出し
さへすれば、憂鬱になるので、運動をしたり、
無駄話をしたりして、出来るだけ忘れる事に
つとめてるるのだけれども、時々突然に襲は
れるので弱ってみる。しかし昨日は食卓で
係の話が出た時に聞いたのだが、同じ食卓仲
間、(大西と相馬といふ海軍少佐と大塚とい

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

ふ陸軍一等主計と)の内で相馬はは少佐なし、
大塚と大西とは名(々)寂漠でる倍をなくしてゐ
る。大西は六つたなうたる倍を、大塚氏は三
つのまを、しかしこの一月になくしたといふ。
さういふ話をきいて見ると私などはまだ好い
方だと思った。この一月になる倍をなくして、
二月中旬の船で発(た)つてくるといふ様な事にな
れば、私なども免を蒙ってくるふ。大塚といふ
人は、実人とは見えない様な穏やかふ人で、
私より二つ位年下でありながら四十五六にも

(和辻用箋)

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

見えるくだが、随分気持の上では苦しいらし
い。さういふ事を聞いて見ると、私などが憂
鬱な気持になるのは少し気弱すぎるとも思は
れる。然しそれは我々自身の内生の問題だか
ら何とも仕方がない。

二行目の末本は私よりは大分若い人
だが同じ船に坂本といふフランスの日本大使館
の書記官がのってゐて、私とデ(ツ)キゴルフの
りゝ仲間でもあり、香港では一所に見物して
歩いて大変仲よしになつたのだが、この人は

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

夫人をつれて巴里へ行く筈で神戸から一所に上船したが、船のドクトルが夫人を誘惑して、連れて行かない方がよからうと云ったとかで、門司で夫人を東京へ帰した。その時には海の中へ飛び込んでしまはうか」と思った、と云ってゐた。この坂本氏は私よりは大分若い人だが、永井荷風の物とかにある由。

香港からは大分西洋人がのってゐた。女の人も大分多い。廿七日は日曜だったので、西

（和辻用箋）

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

洋人は皆着飾って食堂へ出て来たが、食後社交室（lounge）で、いやにそうそうした四十四五の女が獨唱を初め、それを五十五六の男がしきりにあっせんしてゐた。その内その男が日本の女にすゝめてピアノをひかせた。この日本の女はシンガポールの三井物産の店員の妻君とかで、人前でたゞらに亭主たしなだれかゝるので人々の注目を集めてゐた。がまもなくはづかしがらずにピアノをひきながら獨唱をはじめた。皆その後でやせた男が

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

いのばかりで閉口して室に退却したが、あとできいて見ると、後甲板ではダンスをやってみた連中もある由。西洋人がふえてからは、毎日さういふ事が続く様になつた。若い男はしきりに女のやきげんをとつて歩き、若い女はしきりに着物を着かへたり化粧をしたり、はしやぎ廻つたりしてゐる。しかし女たちは皆拙い顔ばかりで、人間らしいのは獨逸をした奇麗ちきなおばあさんだけだ。然し可愛い子供が三人ほどゐる。シンガポールでは日

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

本人が大分沢山降りて又西洋人がふえる事。これはオーストラリヤから英国へ帰る人だとの事。その先は一層かもいろ方面で船がにぎやかになるだらう。毎日見てるとつくづくかうりふ感じがする。日本の女なら十人並以下の顔でも積極的にイヤな感じはしないが、この船にのってる西洋の女などは、丁度悪い油の料理を喰いすぎた時のやうに、少し見てるとムカ〳〵してまる。

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

おばあちゃんにもそう夏子にも別々に書かないから、照からよろしく云っておくれ。さうして聞かせていく事は照から話してやっておくれ。たかや松枝がりやにも。

体を大事に。神望を弱めないように。

三月二日　捨郎　照様

一行アキ

八　昭和二年三月三日　エハガキ

昨夕シンガポール着。善一郎さんは廿六日頃スマトラの方へたたれたとかでお目にかゝ

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

れなかったが、お店の三宅さんが親切に方々へ案内して下さるので、甚だらくに見物して廻ってみる。今日もこれから少し方まで見てまるつもり。シンガポールの町は上海香港よりよほど変ってみて面白い。暑さは丁度日本の夏位。虫が盛んになりてくる。三月三日

哲郎 照様

九 昭和二年三月四日 エハガキ十枚つづき

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

(1)
三月二日の夕方近くシンガポール東方の海峡に入った。海からのぞむと小山が連続しており一向に熱帯らしい特別の感じはしない。距離が遠いわりに山上の樹木が目立つのは、木が大きいせいかも知れなかったが、しかし大体として日本の海岸にそんなに違った感じでない。ところが望遠鏡をのぞいて見ると、海岸には丁度この写真に見える様な漁村がある。磯辺には椰子の林がずらりと並んでいる。日本の海岸の松林の代りに椰子の林が

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

あるわけだ。尤もこの写真にうつってる家は土人の家ではなくて別荘か何かだ。この椰子の林だけが景色を整斉らしく見せてゐる。小山の風景は望遠鏡で見ても大して珍らしい感じではなかった。

(2) 海岸に見えた土人の家といふのは、この写真の様な恰好をしてゐる。屋根は椰子の葉でふいてあるが、遠くから見ると葉屋根の少し荒れた様な感じで、我々にはあまり珍らしくもない。

(和辻用箋)

(和辻原稿)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

かういふ家が所々に群がり、椰子の林が続いてゐる海岸を眺めながら、船はだん〳〵シンガポールに近づいて行った。五時半に風呂にはいり、支度をして七時少し前に甲板に出ると、船が徐かにハトバに近づいて行くといふだった。同じハトバには郵船の香取丸が欧州からの帰路に碇泊してゐる。香取は翌朝（三日）日本へ向けて出発するとの事だったので、香港の写真に詳しく印象記を書き込んだのを封入して手紙を出して置いた。（それはうまく

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

香取が持って行ってくれれば十七八日頃には
京都へつくと思ふ。なほ三日夜にも
(3) 葉書を出したが、これは四五日遅れる
かも知れぬ)この写真は自由丸のついたハト
バ(Ukaap)ではないらしいが、これによく似
た所へ横づけになる。上海でも香港でも船が
港へはいると泥棒の用心をしろと云はれて、
室に錠をおろしてるふのだが、シンガポール
は特に泥棒のいどい所だし、又ハトバへ横づ
けしてる時には終夜自由に人が出入するの

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

で、一層用心が必要なのだという。殊に窓をあけて置くとそこから物を盗まれるので、窓も閉めなくてはいけない。止海や香港では窓をしめても平気だったが、赤道のシンガポールでは、この暑さに室を閉めきるのは苦だ閉口だった。

三日附のハガキにも書いた様に、善一郎君の好意で三宅という人が船へ迎いに見えの町へ散歩に出かけた。賑かな町までは一哩以上あるので、自働車（善一郎君の店の支配人の

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

自働車）にのって出かける。車上は
(4) 至極涼しい。最初にシンガポールの町
から受けた感じは、町全体が白っぽいという
事だった。これは恐らく熱帯の町の特色なの
だろう。柱や壁は皆白くぬってある。その白
色は所々薄黒くよごれてるのだが、しかし
そのよごれ方が上海や香港とはまるで違う。
きれいな感じがする。これは翌三日に晝の光
で見た時にハッキリわかった事だが、白い壁
が黒くよごれてるそれが丁度カク汚いを

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

したその様な感じになってみる。多分整帯特有な猛烈なシモクで汚はれるせいだと思ふ。これも書見て解ったことだが、屋根に赤瓦がやはり半ばは黒くなってみるけれども、その薄黒い赤がやはり汚れて一種特別なさびを帯びてみる。だからそんなに古くない建物でありながら、一種風雅な感じの色彩を持ってみる。かういふ事は当整帯特有の現象だし、整帯の建築として自ら印度風が用いられてみるので、上海や香港と違い、こいで

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

は西洋。支那。印度が丁度三分の一づゝ混じてゐる様に思はれる。かういふ町であるところへ、気候が暑いから、町の夜景は日本の町と同じ感じで。

(5) 人がぞろ〳〵歩いてゐる。今まで船で自服を着て居り。日本の夏と同じ様な暑さだったが、町へ出て見て初めて、あゝりかにも夏だな、といふ気がした。やがて自働車が町の郊外から植物園の方を走った。丁度この字真にある様な道を走った。郊外へ出て

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

最初に驚いたのは、虫の音が盛んに聞えた事だ。日本の八月頃と感じがよく似てゐる。夜で暗いから樹木が日本とどう違ってゐるかはよく解らなかったが。自働車の上で涼しくはあるし、虫の声は頻りに聞えるので、南洋へ来たといふ事よりも、急に夏が来たといふ事の方がよっぽど珍らしかった。

自働車は野のまはりの住宅地を走って廻ったのだが、住宅は皆夏らしく窓をあけ放し、ヴェランダの広いところへ青い燈などをつけ。

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

日本の夏の遊び場の様な感じになってゐる。
土地がいろいろあって、家のまばらには広い庭を
もち、樹木が沢山あって、丁度林の中のとこ
ろどころに家がある様な感じだ。
ゆがてまた明るい町へ帰り、土人を見せる
といふ。
(6) この New World (The New World) といふ浅
草の花屋敷の様なものをもう一つ連れて行かれた。
主としてマレー人の遊び場だそうだが、野天
の下に無数の卓が並べてあって、そこにマ

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

レー人の若い男女がのんきさうな顔をして氷水か何かをのんでゐる。中央には亭の少し大きい位の建物があって、その中でマレーの土人の踊がある。丁度この写真にある様な土人の女が、日本の踊りももつとく悠長な単調な踊りを踊ってゐる。踊りとしてどこも面白いところはなりが、たゞ目につくのは手の指の運動だった。前へ突き出してゐる腕そのものはあまり動かなりが、指だけは弓なりにそらせたり、かゞめたり、しきりに蛇の様に

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

動かしてみる。それを見てみるとこの格の感
りが、又面相などに、シャムあたりの仏像と
似通ふものがあるのを感じた。
十時過ぎに Marseil Europe でピールを一杯の
んで、それから又自働車で船へ帰って寝た。
そんなに暑くもない。
(7) 〈 翌三月三日には十時一寸前に三宅氏が
迎へに見え、その日の昼な町を通って町の
中央に出、正金の支店の副支配人をしてゐる
金原敏雄といふ中学の先輩をたづね(その裏

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

さんには運はなかろうたが、目白出の由)、それから両替屋へ行って金を替へ、いるめしはシンガポールの三越と云はれてゐる John Little やの。といふデパートメントストーアの食堂で手軽にすませ、なほ少し見るものもあるからと又車にのって、昨夜通った植物園から町の外のゴム林の中をドライヴし、シヨホールといふ隣國まで回々教のモスクを見に行った。はさうらしいもの写真にあるのは植物園の一部。ひる迄見るとなる程と整然らしい植物ばかり集まってゐ

(和辻用箋)

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

るが、しかし実際見れば、そんなに珍らしいという感じはしない。樹の形は皆日本のと違ってはゐるが、景色全体はいかにも夏らしい感じで、全体としては知らないものを初めて見るという気はしない。殊に町の外へ出て野の中の街道を通ると、両側に繁茂してゐる草の感じなど、日本の草とよく似てゐると思った。ゴム林なども、林の感じはさう珍らしいものでなく

(8) 〈
い。幹は白樺に一寸似て居り、葉も白

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

様のをもっと小さくした様で、大きさは大抵
高さ二三間位。太いので根のところの直径が
一尺位。だから林の中にはいっても決してウ
ッサウとした感じはしない。（禁煙イキ）にゴムの木の
中には、日本の秋のを同じ様に紅葉したのが
あって、林の感じが日本の十月頃の雑木山に
似てゐる。ゴムの取り方は、土から二三尺位
のところに一尺位の傷をつけ、そこから流れ
て出る樹の汁を小さい茶碗にうけて置き、そ
れを集めて歩くのだ。丁度牛乳と同じ様な汁

（和辻用箋）

ガラス使用

で、一本の樹からはほんのポッチりしかとれない。それをバケツに集めて歩いて、小さい工場で酢酸を混ずると丁度豆腐の様な真白なフワ〳〵したものになる。それをシンがボールから輸出して、大々の国のゴム工場でいろ〳〵なものをそぜて精製するのだとの事。朝早く傷をつけると二三時間位汁が出てくるが、やがて自然にキズがなほってとまってしまふ。だから十時頃にはもう汁集めをすませる位にすくみだといふ。さういふゴム林の中を一時間

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

以上もドライヴして、この写真にあるジョホール河（実は海）にかかった。そこに橋があって、それを渡るとジョホールの國になる。

(9) ジョホールで回々教のモスク（寺院）を見物してゐる内に、驟雨がやって来た。日本で一番猛烈な驟雨位のもの。その中をゴム林を通ってシンガポールに帰って来た。

シンガポールの東五哩位の海岸にタンジョン・カトンという避暑地がある。そこに日本の料理屋もあるから、久しぶりで浴衣がけで晩

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

食を停止
するその事で、自転車を走らせてそ
ちらへ行った。シンガポールから町つづきだ
が、なぐシンガポールとちがって珍らしいと
思ったのは、この写真にある椰子の木
が並木の様に生えそろる事だった。日本の海
岸の町で松がそろうとうろを、丁度椰子の木が
代りにそろると思へば大体の見当はつくだろう。
さうりふ点で町の工合は一寸面白かった。
ちとで聞いた話だが、この海岸で、磯に面
した場所では、ちゃう大きくない家が月二百

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

五十円位の家賃の由。須広ちたりの海岸とあまり違はない相場だと思った。

(10) この写真はタンジョンカトンの海岸にある料理屋の一つだが、私の案内された迎陽館といふのは座敷だけ日本風になってゐて、この写真のと違ふ。この写真の景色は、迎陽館から西を見たところによく似てゐる。どこかういふ風な景色のところで夕食をしたのだが、日本食でちることはとにかくとして、その設備のきたない事、給仕に出てくる女中

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

が怪物の様でもう暫くまなど、とても感じが悪く
て落ちつく気はしなかった。この家に、同船
の山内候爵の弟が昨夜泊ったというから驚く
外なかった。
船の方がよほど気持がよいので早々にき
り上げて帰った。
夜は相應に涼しく、蒸たきいたほど暑苦し
くはない。
一行マキ
翌三月四日朝出帆。今五日午前十一時過彼

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

南（Penang）着。今晩出帆するらしい。郵便が出せるらしいから、以上で一先ず送る。

三月四日　照撮

一〇　昭和二年三月五日―九日

(一)　三月四日朝シンガポール出帆。五日午前十一時半頃ピナンに着いた。船がついた時は丁度ケビンで前便の手紙を書いてゐた時だったが、間もなくステュワードが手紙と女の客

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

が訪ねて来たという。行って見ると東洋大学で教へた舟木愛子という女（前に仏蘭の写真や雑誌を送ってくれた人）がまってゐる。さうして先生はどうしていらっしゃる事を知らせて下さらなかったかという。こちらは実はこの人がピナンにゐる事を知らなかったのだから仕方がないが、それをランチで舟まで出迎へられて少々恐縮だった。これから自分の家の自働車で町の案内をしたい、又洋食にあきてゐられる様なら家へ行ってお茶づけを差上

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

げたいと云ふ。しかしそれは遠慮して、船でひるめしを済し駈足し、午后からはランチで上陸して毋末氏の自働車で町をのそはした。

一行アキ

無線電信で阪神地方の強震を報じて来た。然し若王子は大丈夫と安心してゐる。

一行アキ

(三)日彼南の町は(一)の写真にある様なものだが、シンガポールと違って町が薄い色を持ってゐる。決して白色の感じではない。薄黄

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

が薄青か何かしら色をぬらない建物はない。
またシンガポールほど雨に洗はれた感じもない。同じ熱帯で、しかもあまり遠くない所にある町が、こんなに感じが違ふのかと驚くほどだった。またシンガポールは郊外へ出ないを椰子の樹が見られなかったが、こゝでは町の真中にもある。多分シンガポールは泥土だし、こゝは京都あたりと同じ様な、底が岩で上が砂まじりの土といふ地質だから、かういふ相違が出来た事と思ふ。椰子の木は地質の

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

荒い、悪いとらうでないと作らないらしい。
この写真はピナンの郊外の椰子林だが、あと
で山の上から見下した時には、ピナンの町の
附近の平地は皆この椰子林だった。この林は
英人が植林したものとの事で、木が
秩序正しく並んでみる。

(三) 椰子林をぬけてケーブルカーにのりに
行く。このケーブルカーは比較山のよりはず
っと貧弱なもので、印度人の運転手が一人つ
いてみる。レールなどもトロッコのレールの

(和辻用箋)

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

少し大きい位のもの。速力もよほど遅い。二千四百尺の高さまでのぼるのに、三十分位もかゝった。ケーブルカーから見下してゐると、平地には椰子林があり、山にかくるとゴムの木やその他葉の美しい木が見える。その間に、その木の紅葉や若葉が非常に美しい。その間に、葦に似た草が、一度日本の薄の様にきれいに白い穂を出してゐる。下草には、日本の秋草に似た小さい紫色の花が点々として咲いてゐる。さうして鉄道の両側には大きい岩が、家

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

位の大きさの岩がゴロゴロころがってみる。よほど日本の春秋の景色に近い。

一行アキ

(107) この写真が山の上の停車場で、敞山のよりはずっと小さく淋しいが、然し、近くの山の上には立派な別荘が沢山建ってみる。それは皆支那人の持物だそうだが、熱帯でもこれだけ高い所にゐれば、涼しくはあるし、景色はよいし、かなり住心地がいゝだらうと思つた。

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

山の上の見晴らし台に行って、茶をのみながら休息した。山の上の樹は下と違ってよほど日本に近いものがある。樹の名は知らないが、檜に酷似して、葉のもっとこまかなもの、若王子の家にある白木蓮の木に似て葉の一寸小さいものなどが並んでゐる。それが恰も植木屋に手入れされたかの様にりく枝ぶりで、幹には工合のいくさびがつりてゐる。かういふ樹を見てゐると、感じはちっさうしてゐるし、おまり熱帯らしい気持はしない。

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

(五)

この写真は見晴らし台から彼南の町を見下ろしたところ。手前の木は、前に云ったのさき仮た木。遠くに見える町は郊外をのぞいて繁華なところをほとんど全体含んでいる。×印あたりのところに船がとまってみて、そこからランチで五分ほどして(一)の写真の近所のはとばに着いたのだった。

山の上は少し涼し過ぎる位だったが、少し休んでから又ケーブルカーで下へ降り、又郷子の林の中を走って植物園へ行った。こいの

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　ガラス使用

植物園はシンガポールのと違って山ありの谷
にある。山にはムクムクといろいろな樹が茂って
ゐる。木は一々何というふか知らぬが、全体の
感じは、日本のよく茂った山（松檜類がなく
てたゞ楠やかしやしいなどのみのある山）に
よく似てゐる。植物園の真中には岩のゴロ
した谷川があり、その上流にはてくてくる。
(六) 滝がある。この写真は人工的なところ
だけ見せる様にとってあるが、さういふ個所
よりも、あまり手をかけない自然のまゝのと

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

その頃うちにみたポインターの仔犬

ころが面白かった。丁度この写真の個所のすぐ右手あたりに、ダラ〳〵の崖があって芝が生えてゐる。そこに二三疋小猿がゐたので、毋木夫人が持って来たバナナを投げてやると、小猿がだん〳〵そばへやってくる。さうして山の木がざは〳〵動くかと思ふうちにあちらからもこちらからもぞろ〳〵猿が出てくる。親猿でもナイフ小さいくらゐ。る猿はもつと小さく可愛い。毛は皆非常にきれいで、きたならしい気持はちっともしない。こんな猿な

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

う飼って見てもいゝと思ふほど可愛ゆい猿だ。

こちらの手に持ってゐるバナナを取りに来たのは二三匹位だったが、一寸とからかって来た猿は皆で四五十匹もゐたらうと思ふ。

(七)

この写真にあるのがパパイアといふ果物の樹になってゐるところだ。パパイアの実は中をわると丁度南瓜に似た色をしてゐて、果かさは真桑瓜のやう。果もそれに近い。船でたべさせたが、大してうまいとも思はなかった。植物園からの帰りに、船の出帆には未

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

だ一寸間があるからと云って、舟木氏の社宅に寄った。文化住宅式の三間位の小さなものだが、それにもっと小さい召使部屋三間が一棟となって続いてみる。そこに自家用車の運転手（印度人）とコック（支那人）とも一人下男（マレー人）とが住んでみる。生活程度は我々住のものだろうが、ちゃんと自動車を置いてそれを乗りまはしてみるところがいかにも植民地らしい。そこから又自動車で送られて船に帰り、六時に船は出発した。

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

(八)

これが有名なマンゴステインの写真だが、シンガポールでもピナンでもとうく食べる事が出来なかった。隣室の男は、シンガポールの田舎で百姓から買って食ったとの事だった。私はそんな熱心もなかったので、町で果物店で聞いても無かったのでそのままにした。

船は彼南を六時に出たが、彼南からは印度人がデッキパッセンヂャーとして沢山のった。

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

丁度私のケビンの窓の下にも、赤ん坊を抱いた母親が三つ四つと七つ八つの子を傍にしてデッキに座ってみた。まだ荷物積込みのあと片づけが出来ないので、天幕を張ってデッキパッセンヂャーの席が出来るまで一時こいた休んでみたのだが、その母親がいかにも倍を可愛いいと云った様に、愛撫してゐる。小さい兄と姉とが赤ん坊をちやしてみる。それを窓から眺めてゐると涙がこぼれさうな(九)気持になった。その内にガーツと騒雨

(和辻用箋)

15

(八)

(原稿用紙)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

がやって来た。私のケビンの外の廊下はわりたせまいので、雨が廊下の奥までふり込んで来る。印度人たちは荷物を下げたりして雨のかからない所へ逃げて行く。あとにはぬれてもいいもの、鍋かまがのこってみた。こんな風にしても海をこえて遠いところを往来してる家族があると思ふと、何とも云へぬ感慨が胸に湧いた。ペナンを出た翌日から海が荒れ出した。今度は船がシテに揺れるので気持がわるい。そ

(和辻用箋)

(原社紙)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

絵ハガキの写真

それが二日つづいた。とても読んだり考へたり書いたりは出来ない。やっと今朝になって海がしづまった。コロンボがもう近い。

これはデュリアンという果物の写真。味は実にいい由。これも食事が出来なかった。

しかしシンガポールで回々教の寺院を見に行ったとき、ジョホール王の庭の中にこの果物が樹になってゐるのを見た。三月五日―九日

照撮　哲郎

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

一

一一日 昭和二年三月十日 エハガキ

昨日晝食後上陸。コロンボより七十哩ほど
距ったキャンデイといふ山の上の町を見物に
出かけ、十時半頃帰って来た。自働車にのり
つかれて今日は少しだるいので、午前中一寸
町まで散歩に行っただけで引籠ってゐる。コ
ロンボの博物館とか公園とかは、もう見物に
行く勇気がない。
今日宮津の地震の報告が領事館から来た。
今日午后四時コロンボ出発の豫定。今度は

一週間ほど陸が見られない。三月十日コロンボにて指郎

一二 昭和二年三月十五日

上海、香港、シンガポール、彼南、コロンボと港による度毎に手紙を出したが、皆着いたと思ふ。今はもう印度洋も西に出はづれて。明日はアラビアの南端のアデンに着く由。日本を出てからはもう一ヶ月も経った様な気がするが、数へて見るとまだ一ヶ月にはならない。

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59

ガラス使用

この調子で時間が長いとすると一寸考へものだと思ふ。

コロンボを出ると波が一寸大きくなって、印度洋が少しは荒れるかと思ったが、玄海灘ほどの事もなく、至極平穏だった。それはかりか暑いくと言はれてゐた印度洋が一向に暑くない。シンガポールからコロンボまでの間に頸のまはりに汗もが出来て、カラーにすれて一寸困ったが、印度洋へ来るとそれもなほってしまった。一昨日あたりからは、麻の白

（和辻用箋）

ガラス使用

服が少し寒い位で、昨日はとうとう黒の薄羅紗の服を出して着た。結局シンガポールあたりが一番暑かった事になる。

海の上の生活は、一熱帯だらうが日本だらうが大した変りはない。波の色が熱帯へまでだん〳〵濃くなるのが初めは珍らしかったが、印度洋では天気次第で日本の海と同じ色でもあるし、空は時々日本と同じに曇るし、何もさう珍らしいとは思はれない。多方驟雨が来たあと、半円全体の見える虹が立ったが、こ

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

私は日本の近海だってもあり得る事と思ふ。
こんな風に大海に出てしまくば別に珍らしい事もないので、前の手紙で云った様に、船を保養院と心得て一生懸命に体の保養につとめてゐる。殆んどもう義務の様にそれに努力してゐる。まづ朝起きると、口を洗って、ボイの持って来た果物を喰べ、煙草をくはへながら便所へ行く。西洋便所だから、夏坊の様に出た便がちゃんと見える。少しでも少いとか何とかであれば、その日の食物

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用

を加減する。それからケビンへ帰って髭をすり、顔を洗い、洋服を着込む。それをゆっくりやってみると、八時頃になる。それから甲板へ出て半時間ほど散歩する。八時半に食堂が開き、食卓で首席一等運転士や海軍少佐や陸軍一等主計などと議論を始める。しきりに辯じ立てゝみると、食堂に一番あとまで残る。九時半近くになる。それから甲板へ出てデッキゴルフやピンポンをやる。両方とも緩慢な運動だからよほど時間を長くやらないと運動

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59　　ガラス使用

たなうない。少し運動したといふ気持になる時分にはもう昼飯になる。昼飯後はわけ食卓で話が長くなる。首席運転士(Chief officer)が議論ずきなので、大抵は一時半位までかかる。そのあとは、やはり整理だけあって日本の夏のやうに眠くなる。前にはよく昼寝したが、どうもあとにがわるいので、ケビンか甲板かでゴロリと横になってボンヤリしてみる。この時が一番危い時で、家が恋しくなったり、こんな旅行が馬鹿らしくなったり、皆がさぞ

国立国会図書館　タイトル『故国の妻へ』　請求記号 WB12-59
ガラス使用